

表一21 昭和50年度施設内特殊学級の現状

施設名	小学校			中学校		
	学校名	学級数	児童数	学校名	学級数	生徒数
大笹生学園	大笹生小	5	43	信陵中	4	40
安積愛育園	安積一小	5	49	安積中	3	34
桜が丘学園	石川小	5	45	石川中	4	43
ばんだい学園	猪苗代小	7	73	猪苗代中	4	41
東洋学園	富岡二小	8	86	富岡二中	3	25
あさひが丘学園	小名浜東小	3	28	小名浜二中	2	13
計		33	324		20	196

(備考) 「高校教育課調査」(昭50)による。

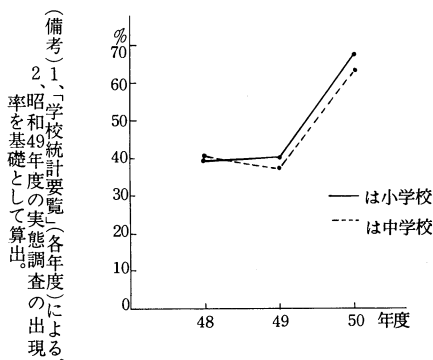
このように、児童福祉施設及び病院の児童・生徒に対しても、教育の機会が拡充されてきている。
 (3) 向上する就学率
 特殊教育の就学率は、年々あがってきており、特に昭和五十年には飛躍的な上昇を示している。
 これは就学指導体制の整備による就学猶予・免除児の減少によるものと考えられる。

表一22 昭和50年度病院内特殊学級の現状

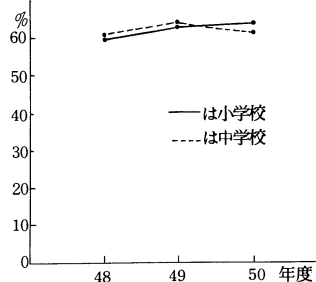
病院名	小学校			中学校		
	学校名	学級数	児童数	学校名	学級数	生徒数
国立郡山病院	開成小	2	16	郡山六中	1	10
財団法人竹田総合病院	謹教小	3	20	若松三中	2	8
磐城共立病院	御厩小	2	14	内郷一中	1	4
国立翠ヶ丘療養所	豊間小	2	16			
計		9	66		4	22

(備考) 「高校教育課調査」(昭50)による。

図一21 特殊教育諸学校の就学率の推移



図一22 特殊学級の就学率の推移



(4) 整備が進む施設の状況
 特殊教育諸学校の建物保有状況を必要面積に対する保有面積の割合でみると、昭和五十年において校舎七四・七%、体育館五七・七%、寄宿舎二五・一%である。
 これを昭和四十八年度と比べると、校舎一・二倍、寄宿舎一・四倍となっており、寄宿舎はほぼ充足され、校舎については年々整備されてきている。
 体育館は、盲学校がろう学校と共用しているために必要面積に対する保有面積の割合が低くなっている。
 (5) まだ不足している設備
 理科教育振興法に基づく理科設備の充実率をみると、盲・ろう学校で五八%、養護学校で三三%となっている。これを全体でみると四七%となるから基準総額の半分を充足しているといえるよう。
 次に、算数・数学教育の設備状況をみると、理科設備の場合に比べ、その

六、社会教育

(1) 家庭教育

近年、家庭における教育機能の低下が指摘され、家庭教育の振興充実が大きな課題となっている。本県においては家庭教育学級の育成に努めてきたが(後掲表一26参照)昭和五十年から乳幼児を持つ親を対象に乳幼児学級を開設している。昭和五十年度は、三十一市町村に三十四の乳幼児学級が開設され、千六百二十七人が受講している。また家庭教育(幼児期)相談事業が昭和四十七年度から三歳児(第一子)を持つ両親を対象として実施されており昭和四十九年度は次のような事業を行った。

- ①、はがき通信 年間十一回(一万二千人の三歳児を持つ親)
 - ②、巡回相談 県内二十六か所
 - ③、テレビ放映 年間三十回「小さな世界」を放映
- このうち、「はがき通信」の質問内容をみると、「こころ」に関するものが半数を占め、ついで「からだ」に関